

分科会Ⅶ

10月17日(木) 9:00~12:01/ランB

座長 株式会社さくら苑 代表取締役 重永 啓輔 氏

座長 医療法人竹内医院 グループホームのんた 施設長 長弘 亮二 氏

テーマ「GHケア・認知症ケア・自己決定支援・
重度化防止 等」

時間	演題 / 副題	所属	発表者 (都道府県)
9:00 }	夜間転倒を繰り返す入居者様に対するケア 穏やかに過ごして頂く為に	グループホーム いきいき栄	森永 健矢 (北海道)
9:14 }	想いに添い、ケアへつなげる	グループホーム はまど	打樋 聡美 (徳島県)
9:28 }	私の「夢ノート」を達成するために 「元気で長生きしたい」への支援	グループホーム 第2グレイスフル辰野	早川美保子 (長野県)
9:42 }	視力の回復によるQOLの向上 ～大好きなビールをいつまでも美味しく～	グループホーム縁	風間 貴子 (新潟県)
9:56 }	夜間入浴の効果 認知症高齢者にどのような効果があるのか	グループホーム鳳凰横島	川口麻衣子 (京都府)
10:10 }	Professional ～認知症になっても輝き続ける私～	渋谷区グループホーム つばめの里・本町東	佐々 菜摘 (東京都)
10:24～ 休憩			
10:38 }	日頃の所作は私の気持ち ～言葉にしなくても～	グループホームアンジェロ三碓の里	仲谷 真理 (奈良県)
10:52 }	通いの場と活動を通して元気な生活 楽しみながら認知症予防と元気な生活	グループホーム ゆりの木苑	遠藤 慶一 (千葉県)
11:06 }	新規利用者の早期の安心・定着を実現する 好転スパイラルを生み出す	アイユウの苑グループホーム	江藤 文彦 (山口県)
11:20 }	認知症予防に着目した歩行練習について	グループホームオアシス平野	浦 一希 (大阪府)
11:34 }	モンテッソーリケアを取り入れた介護の実践 ～持病の進行があっても、いつまでも自分の力で生活したい～	グループホーム 星の家中央	飯田 宏之 (岡山県)
11:48 }	グループホームだからできるゆったりとしたケアを目指して ～先生が居って良かったわ～	グループホーム きららの家	大島 智子 (島根県)
総 評			

夜間転倒を繰り返す入居者様に対するケア

◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 重症化防止
- 3 医療との連携

穏やかに過ごして頂く為に

北海道・札幌市

かぶしきがいしゃ

株式会社オストジャパングループ グループホーム いきいき栄

さかえ

発表者：介護福祉士 森永 健矢

もりなが けんや

共同研究者：阿部 新、圓谷 友紀

あべ あらた まるや ゆき

認知症対応型共同生活介護（グループホーム）

2005年10月1日に開設

1階に認知症対応型通所介護
2階と3階グループホーム 2ユニット定員18名
共用型デイサービスも行っている。

(取り組んだ課題・はじめに)

事例の対象者であるT様は2023年10月に入居された91歳男性。要介護2で前頭側頭型認知症と診断されている。入居前から『一人で外に出て行って帰ってこれない事があった』『夜間不眠で活発に動いていた』等家族様からお話あり。入居後は「外に行く」「車見に行く」等離設の危険性や、他入居者様がいるにも関わらずテーブルを持ち上げ動かそうとする、ソファの上に立つ等の危険行為が多く目が離せない方であった。又、興奮しやすく危険行為などが見られ職員が介入した時に暴力行為や暴言を吐かれる事が多くみられていた。2024年3月に夜間ベッドの上に立ちバランスを崩し転落。左大腿骨を骨折し手術の為に入院されるが10日で退院となる。退院後は日中寝ている事が多く、夜間足・腰の痛み訴えあるものの活発に動かれる事が増え夜間帯での転倒が続いている。

転倒・重症化を防ぐ為に行った支援について報告する。
(倫理的配慮)

発表にあたり、ご家族の承諾を得て個人の特定ができないようにプライバシーの配慮を行った。

(具体的な取り組み)

- ①ソファやベッド等の高い所に登る事や他者に対しても手を上げる行為がみられ、前頭側頭型認知症の症状について資料を用意しユニット全体で学び直す。
- ②日中起きている時間・活動量を増やす為に食席で過ごして頂く、パズルの提供。又、歩こうとされた時には無理に止めると怒りだし暴力行為ある為、氏の歩きたい気持ちを優先して車いすは使用せず、基本的に職員が支えながら歩行してもらうよう対応。ただし、痛みの訴え強い時には車いすを使用する。
- ③家族様に許可を得て4月からベッドではなく床に布団を敷いて寝ていただくように変更。
- ④月2回ある内科の訪問診療で医師に夜間帯の様子を報告・相談。家族様から「睡眠薬飲んだらダメなのかい」とお話あった事も報告し4月中旬からデエビゴ錠2.5mg（睡眠薬）服用開始。

⑤センサーや家具の位置の見直し。

⑥精神科受診の検討。

(活動の成果と評価)

日中食席で過ごして頂くが居眠りをされる・座っているのが辛いのか椅子からずり落ちそうな体勢で座ること多い。氏からの要望もありソファに移動するが、降りようと何度も床に手を付く、床に座っていただくも今度はソファに上がろうとする行為を繰り返して行われ、一瞬目を離した隙に立ち上がって歩かされている事もあり目が離せない状態が続く。日中は動かれる時間も多いが寝ている時間も多いため夜間0時過ぎ頃まで活発な事変わらない。デエビゴ錠2.5mg服用後も様子変わらず5mgへ増量。寝つきは良くなったが1・2時間程で目覚め、動きが活発な状態に戻ってしまう。他者対応中で対応が遅れた時やセンサーが鳴りすぐに駆け付けても動きが速く訪室した時にはすでに立ち上がろうとして転倒。立ち上がる際に掴まれる場所を作ってもADL低下により、立ち上がれずに転倒、立ち上がったとしても歩き出しで足がもつれて転倒する事が続く。痛みの訴え強い時には車いすに座るよう促しても理解できずに押して動かそうとする、車いすを跨いで歩いて行ってしまい中々使用する事ができなかった

5月に往診医から精神科受診を勧められるが、家族様から「薬を飲んで寝たきりになったら可哀想」というお言葉もあり受診には至っていない

3月4件 4月4件 5月5件（2件日中）

6月4件 7月5日現在で2件 計19件

(今後の課題・考察・まとめ)

19件中17件が夜間帯での転倒で、職員間で案を出し合い試してはいるものの改善には繋がっていない。骨折箇所が増えるという事は今現在起きていないが、今後その可能性も考えられる事も含め家族様ともう一度精神科受診に関して話し合いを行い検討していく予定である。少しでも落ち着いて過ごしてもらい、転倒を防げるよう支援を行っていきたい。

想いに添い、ケアへつなげる

◆キーワード

- 1 想いに添う
- 2 食べること
- 3 その人らしさ

徳島県小松島市

いりょうほうじんしょうふうかい

医療法人松風会 グループホーム はまど

うてび さとみ

看護師：打樋 聡美

はやかわあけみ・みきちえ・やましたともこ

共同研究者：早川明美・三木千恵・山下知子

令和2年9月に開設、2ユニット(18人)

入所者と職員との距離が近く、「共に笑い」「共に泣き」「共に頑張れる」アットホームな施設である。

(取り組んだ課題・はじめに)

食事の美味しさは、単に味覚だけでなく、五感すべてによって構成され、特に視覚による影響は8割に及ぶという報告もある。食器も彩りとなり、美味しくみえることで食欲は増す。また、美味しく食べることは生きる力にもつながると思われる。

当施設は一般食と治療食の食器や膳が異なるため、一般食を食べる他者のものと比較し、美味しそうにみえないという治療食を食べる入所者A氏と出会った。入所者A氏の食への想いに添い、美味しく食べられるケアを工夫した結果、A氏に変化がみられたので報告する。

(倫理的配慮)

取り組みに際して、協力は任意であること、協力しないことによる不利益はないこと、協力の同意は途中で取り消すことができることを説明した。

(具体的な取り組み)

【対象者】A氏 87才、聴覚障がい、慢性腎不全、アルツハイマー型認知症(認知症の程度は中等度)。病気について説明をしても元気であると言い放つこともあり病識欠如がみられる。整容や身だしなみ、排泄・食事・移動移乗はほぼ自立している。他者とのコミュニケーションは口唇で読み取る。他者との交流を好み、明朗な気質である。ケア実施時、BPSD25Qは重症度18点、負担度17点であった。

食事を配膳されても美味しそうにみえない、他者のものと違うことで差別されている等の想いを言い続けた先、混乱に至る日が多くなっていった。その要因として、A氏の想いに添うことなく、受け流してしまったことで、想いや不満が苦痛へと変化し、自尊心の低下等により混乱につながったのではないかと考えられる。

【実施内容】美味しく食事ができる環境支援として、一般食と同じ食器や膳に変更し、盛り付けにも注力し提供する。

【実施期間】2024年3月14日～2024年4月14日

【評価方法】BPSD25Qを実施時・実施1か月後に評価する

(活動の成果と評価)

ケア実践を重ねるにつれて食器や膳への不満の発言は少なくなり、笑顔で食事を楽しめる日が増加した。また生活の中でも、他者と会話を楽しむ、大声で笑う場面や落ち着いて過ごせられる日が増加した。ケア実施1か月後、BPSD25Qは重症度14点、負担度7点だった。

(今後の課題・考察・まとめ)

混乱に至る日が多くなった際、A氏の視点に立ち、想いに添い思考した結果、食事の環境を工夫したことで、食を楽しめる時間が増え、また同様に落ち着いて過ごせられる日の増加につながったと考えられる。

天木らは「認知症の進行が中等度になると、コミュニケーション能力の低下が生じ、自分に生じている苦痛や変化の言語的表現が困難となり、代わりに焦燥・攻撃性・ケアの拒否といった表現となることが多い」¹⁾と示しているように、A氏にとって食事への不満も苦痛となり、この想いをコントロールできず、落ち着きのない言動や苛立ち等、混乱に至っていたのではないかと思われる。また天木らは「看護師が認知症高齢者を知り、理解を深めようとする歩み寄りの意識や人として尊重する姿勢をもつことは重要である」¹⁾とも示しているように、本人の話に耳を傾け、想いを受け止める、そしてその想いに添い、食事の環境の工夫を実践できたことで職員の想いがA氏に伝わり、自尊心の保持や落ち着いて生活ができることにつながったのではないかと思われる。

今後の課題として足を止め、認知症の人の声を聴くことで想いを知り、なにかの気付きをスタッフ間で共有し、ケアへつなげられるスタッフを増やすことである。そうすることで、認知症が進行していく中においても、その人らしく機嫌よく暮らすことができる一助になると考えている。

(参考・文献など)

【引用文献】1) 天木信子, 百瀬由美子, 松岡広子(2014). 一般病院で入院治療する認知症高齢者への看護実践における認知症看護認定看護師の判断. 日本看護研究学会雑誌 Vol. 37, No. 4, 63-72.

私の「夢ノート」を達成するために

◆キーワード

- 1 「夢ノート」
- 2 私の願い
- 3 思い込み

「元気で長生きしたい」への支援

長野県・辰野町

グループホーム 第2 グレイスフル辰野

たつの

かいごしょく はやかわ みほこ
 発表者：介護職 早川 美保子

ふるはた かずのり しょくいんいちどう
 共同研究者：古畑 和憲 職員一同

2 ユニット定員 18 名 平均年齢は 90.1 歳、平均介護度は 1.94 男女比は男性 6 名、女性 12 名

当施設は日本の真ん中とも言われる長野県上伊那郡辰野町にあり、グループホームの他に特定施設入居者生活介護、デイサービスセンターが併設している。

(取り組んだ課題・はじめに)

住み慣れた自宅からグループホームへの入居をご自身で決めて新たな生活をスタートし約 1 年半が経過する。歳を重ねる事で身体の変化を受け入れながら生活している。本人が生きていく為に、積極的に取り組む姿を継続するための支援について報告する。

(倫理的配慮)

発表にあたり、ご本人、ご家族へ説明し了承を得ている。

(具体的な取り組み)

- ・対象者：F 様 女性 91 歳 要介護 2
- ・障害高齢者の日常生活自立度：A I
- ・認知症高齢者の日常生活自立度：I
- ・MMSE 評価 23 点
- ・既往歴：脊柱管狭窄症、高度房室ブロックにてペースメーカー挿入 (R1.7)、うつ・不眠
- ・現病：認知症、高血圧、加齢黄斑変性症、左膝関節症

教員の夫の元に嫁ぎ、専業主婦となる。2 男を育て、夫の定年後は地域の役員やボランティア (入浴・朗読) を行っていた。その後、夫の介護をしていたが H30.10 月腰痛悪化にて本人自身も介護申請した。夫 R4.1 月逝去。東京在住の次男 R4.3 逝去。その後、独居生活となるが家の中で転倒し立ち上がれないことが頻回、社会的に過ごすのがうつ症状の一面などがみられるようになり一人暮らしに限界が生じ施設を検討する。何件かご自身で施設見学し当グループホームに R5.1.31 入居。他利用者様ともコミュニケーションを図りとても前向きに生活を送っているが、心配ごとが起きると不安になり落ち着かず何度も同じ話をしたり説明を求める傾向がある。そんなときに他利用者で野球の大谷翔平選手の大ファンが「夢ノート」(目標達成シート)を書いてみたいとの発信から F 様にも興味を持っていただき参加した。すると、「元気で長生きをしたい」を目標に掲げたが、普段から明るい F 様からは想像もしていなかった「体を動かす」「食事を残さず美味しく食べる」「睡眠をとる」の 3 つの不安の要素を発見した。その 1 つ 1 つに向き合い不安の解消を試みた。

1、体を動かすこと。脊柱管狭窄症、左膝関節症の現病があるため無理をせず強い負荷をかけず毎日 14 時から室内 (共同ダイニング) でのウォーキング、セラバンド体操、棒体操、ラジオ体操。居室にて口腔体操の実施。役割表の活用から調理参加、毎食後の食器洗い、洗濯物たたみ、日めくりカレンダー管理、献立のメニュー書き、居室内のモップ掛け等の日常の家事全般の実施を継続した。

2、食事を残さず美味しく食べること。季節の旬の野菜や地元野菜を使用した食事メニューの実施。

3、よく睡眠をとること。夜間の排泄が 6 回から 7 回あり都度 20 分の程所要時間が必要なため、まとまった睡眠がとれない。朝食後に睡魔が来るため、9 時から 10 時に仮眠をとることをご自身で決め毎日実行。定期受診にて医師と排泄相談しながら体調管理の継続。

(活動の成果と評価)

1：入居以来、家族様との外出以外 1 日も欠かさずに継続して体操、役割の実施を継続した。人には知られたくない口腔体操の継続も居室で行えた。

2：体重増加もなく毎食の食事をほぼ完食した。

3：役割を済ませた後、ご自身のルールで居室ベッドにて 1 時間の仮眠をとった。仮眠時、本人様の寝やすい室温設定で環境を整えた。毎月の定期受診にて医師と相談しながら体調管理の継続ができ落ち着かず何度も同じことを言ったり聞いたりすることなく不安の解消に繋がり安定した生活を送られている。

(今後の課題・考察・まとめ)

「つぶやき」や会話から本人様の思いや希望を拾って来たが、今回「夢ノート」からもっと深いところに 3 つの困りごとがあることに気付いた。9 人の共同生活ではあるが、そこには小さな社会があり利用者様は皆さん気を使いながら生活されていることに対し職員の視点で「満足してもらっている」と錯覚しがちである。利用者様の本音をいかに探り、どの様な支援が必要なのか時代に合わせた取り組みも今後は実践して願いや満足に繋げて行きたい。

視力の回復による QOL の向上

◆キーワード

- 1 自己決定支援
- 2 QOL の向上
- 3 視力の回復と記憶

～大好きなビールをいつまでも美味しく～

新潟県・燕市

グループホーム ^{えにし}縁

発表者：看護職員 風間 貴子

かざま たかこ

共同研究者：山井 喜和子・内山 明実

やまい きわこ うちやま あけみ

社会福祉法人桜井の里福祉会
信濃川と桜とおいらん道中で有名な燕市（旧分水町）
木造2階建て2ユニット18名

「笑顔でやさしくゆったり寄り添いながら穏やかに」の
運営理念に基づき、出会った人とのご縁を大切に地域交
流も力を入れています。

<A様の紹介>

A様女性、80歳代、新潟県内で6人姉妹の5番目で生まれる。幼い頃に麻疹にかかったことで右眼は失明、左目は弱視という状況を抱えながらも20代から東京で暮らしていた。60代になると姉の介護が必要になったことをきっかけに新潟県燕市B地区に二人で移り住むことになった。その姉が他界し一人暮らしになると認知症が出現し始める。小規模多機能居宅介護の利用を経て令和4年9月グループホーム縁に入居された。毎晩ビールを飲むことを楽しみにしながらかすかに見える左眼で何とか部屋やトイレ、リビング等行き来していた。急に「眼が見えません。」「ビールには毒が入っているかもしれないから飲みません。」「疑心暗鬼になってるんです。」と言われついには食事摂らない日が続いたが、手術をしたことで、視力の回復と同時に生活が大きく変わっていく様子とそれまで見えなかったA様の姿を伝えたい。

(倫理的配慮)

発表にあたって、ご本人とご家族に発表内容や目的を説明し、個人が特定されない配慮をすることを伝え、写真等の掲載のご了解を得ている。

(具体的な取り組み)

入居されたばかりの頃、夕食後タンスの衣類をカバンに詰めて「明日家に帰るんでしょう。」と荷造りをし、説明しても納得されず、本人のペースで過ごしてもらっていた。リビングに居ても話し好きの方の聞き役になっており、どちらかと言うと手のかからない入居者になっていた。

ところが令和5年12月に急に眼が見えなく、大好きなビールにも食事にも手を付けない日が増えて行ったため、眼科受診を勧めることにした。幼い頃から何度も眼の手術を受け、そのたびに良くならなかった経緯があったので本人も甥も気が進まなかった。しかし今回は手術できれば見えるようになるかもしれないと言われ、「見えるように手術を受けます。」と意思表示をされた。12月16日手術のできる病院で検査をすると目の前20cmしか見えていない状態であり、重度の白内障であることが分かる。年明けの1月9日に日帰り手術を行った。術後5日頃から

視力が回復してきたのと同時に東京の頃の記憶も戻って来られ急に「東京に帰ります。」と言われたり、子供の頃に住んでいた自宅の事を話すようになった。そこで実家へ行ってみることにした。駅前から自宅までの経路を案内し自宅も自分で見つけて教えてくださる。甥が随分歳をとったことに驚き笑いが出る。仏壇に手を合わせ遺影の写真の方を教えてくださる等見えることで記憶と明るさも戻ってきた。

視力が0.2になると目を近づけて新聞を読むようになり、0.7まで回復するとテレビを見て話をするようになったので、居室にテレビを設置した。食器洗いは得意で「私こう見えても銀座の社食で働いていたの」とホームでの役割となり、東京の生活の事も度々口にするようになり、自分へのご褒美に友人と飲みに出かけていたことを聞かせて下さった。そこで居酒屋に行って快気祝いをする事にした。「こんなばっちゃんが一緒にいいの？良い飲み友達ができて良かったです。」と久しぶりの飲み会で生ビール3杯飲んで楽しまれた。若い頃の姿のように飲んで笑って楽しむ姿が印象的であった。

(活動の成果と評価)

視力の回復と共に若い頃の記憶と明るさを取り戻すことができた。見えない事を理由にせずしっかりと教育を受け、働き、生き活きと生活をされてきたことが分かった。A様は眼が見えにくいことで、子供の頃から想像できないほど苦しみ、人の何倍も努力をされてきたことが私たちにはようやく見えてきた。見えない事が人の性格にまで影響があり、また見えることで自信が出て生活の質がこんなにも向上することを教えてもらった。これからも大好きなビールをいつまでも美味しく飲めるよう支援していきたい。

(今後の課題・考察・まとめ)

「見える・聞こえる」ことは当たり前のようにだが、A様にとっては見えづらいことが普通であったため訴えがなかったのだと思う。自分でなんでもやっていたことで周りもA様の変化の気づくことが遅くなってしまい白内障が進行していったと考えられる。今後も小さな変化に気づき、早めに医療に結び付け早期の回復、生活の質を落とさないように努めたい。

夜間入浴の効果

◆キーワード

- 1 睡眠の質の向上
- 2 職員の意識改革
- 3 時間を有効に活用

認知症高齢者にどのような効果があるのか

ほうおうまきしま

京都府・宇治市

グループホーム鳳凰槇島

かわぐち まいこ

発表者：川口 麻衣子

たち ちえ

共同研究者： 館 千恵

認知症対応型共同生活介護

宇治市に在住で認知症の診断を受けた要介護1から5までの方を地域との関わりを持ちながら支援を行っている

(取り組んだ課題・はじめに)

～お風呂が大好きで毎日入りたいを当たり前～
開設当初は、午前浴のみ実施していたが、開設から3年が経過した頃より、新規のご入居者から、夜に毎日入りたいとの意向があり夜間入浴を始めるきっかけとなった。毎日入りたい方は、毎日入浴している。しかし、職員の意識を変えていくことも課題であった。「週に2回の入浴でいいのでは?」「夜間は職員が少ないから大変」という否定的な声があった。そこで夜に入浴する事や、毎日入浴する事で安眠や認知症の緩和に繋がるか、就寝前に入浴することで、睡眠の質の向上できるのか、効果検証した。

(倫理的配慮)

夜間入浴を始めるにあたり、ご入居者全員若しくはご家族に、入浴についての希望を確認した。入浴中のご入居者の安全面に配慮しスタートした。

(具体的な取り組み)

- ①入居前面接等で、入浴したい時間や入浴の好き、嫌いを確認する。
- ②今までの生活習慣に近い時間で入浴してもらおう。
- ③夜間入浴を始めた当初は、職員から”大変”との声も多かった。大変を”当たり前”意識を変える話し合いを行った。
- ④夜間、中途覚醒や不眠が続く方にも夜間入浴を行ってみた。
- ⑤夜間帯に入浴される方がいる為、日中の入浴者の人数が減り、毎日入浴したい方への対応が可能となった。

(活動の成果と評価)

- ①について…開始当初は夜間入浴希望者4名。現在は3名の方が夜間入浴を行っている。ご家族からも入浴時間や回数で柔軟な対応がしてもらっていると満足度調査(アンケート)から好評な意見を頂いた。
- ②について…長年入眠前に入浴していたが、独居であった為、徐々に出来なくなっていた。施設では、見守り等の環境が整うことで安心でき、再び一人で入浴できるようになった。
- ③について…時間の経過とともに、業務の流れが構築し、夜間に入浴する為の準備等も、自然と出来るよう

になり職員の気持ちや考えに変化がみられた。しんどい、大変との声は無くなり”当たり前”となった。夜間入浴に限らず、急に浴室に行き服を脱ぎだしても、その方の行動を止めることなく、入浴したいという気持ちに寄り添い、入浴介助ができる職員が増えた。意思を尊重することが認知症の方にとって有効なケアである。それが自然と出来るようになり、職員の成長にも繋がった。

④について…夜間に何度も覚醒し、排泄以外の目的で居室から出て来られる方にも実施してみたが、睡眠時間や覚醒する頻度に差がない結果となった。入浴することが好きで自分が入りたいと思っている方には効果が見られ、職員からのアプローチによって夜間入浴を行った方には変化がない結果となった。

⑤について…夜に入浴して頂くことで、日中の入浴者数が減り、その分毎日入りたい方への対応や、散歩・外出する時間に費やすことが出来ている。

(今後の課題・考察・まとめ)

実施前の職員の反応はネガティブな意見が寄せられたが、夜に入浴することで、日中に時間が作りやすく、思っていたより負担とはならなかった。施設という環境の中で、他人との共同生活は、互いにストレスを感じてしまう場面も多いが、毎日、湯舟にゆっくり浸かり、身体を温めることで、ストレスの緩和にも繋がる。認知症の方にとってストレスは、精神状態を著しく悪化させるため、入浴が好きな方にとっては、気分転換となり、毎日のルーチンが確立し1日の終わりを感じやすくなる。夜にしっかり身体を休めることが出来、日中の活動にも繋がる。毎日入浴することで免疫力もアップしている。毎日の習慣を継続して行う事で、出来なくなった事があっても気付きやすい。夜に毎日入浴される方は、体調を崩しにくく肺炎になった際も重症化せず回復に繋がった。毎日全身状態を観察する機会がある為、皮膚トラブルの早期発見に繋がりがやすい。日中の時間を有効活用し、楽しみのある時間が増えたことも利点となっている。

◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 自己決定支援
- 3 グループホームケア

～認知症になっても輝き続ける私～

東京都・渋谷区

しぶやく さと ほんまちひがし
 渋谷区グループホームつばめの里・本町東

発表者： さっさ なつみ
 介護福祉士・佐々 菜摘

共同研究者： ながもり ゆかこ
 長森 友佳子

認知症対応型共同生活介護
 2ユニット：定員18名

生きがい・やる気・元気・楽しさ・感謝・笑顔に満ちていて「ゆっくり、一緒に、楽しく」を運営理念とし、お互いに温かい手と手をつなぎ合って助けながら歩んでいけるよう支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

令和5年4月に法人の切り替えがあり、既存職員の入替わりや環境の変化などによるご利用者様のADLの低下が見られ、本人のやる気や意欲低下に繋がってしまった。

このことから、認知症ケアの手法を使って自分らしさ、役割提供に向けた取り組みをユニット内で展開し、本発表にて報告をする。

(倫理的配慮)

調査協力、研究発表に際し、ご利用者様並びにご家族様に説明し、承諾を得ている。

(具体的な取り組み)

対象者：A様 令和3年6月入居
 性別：女性 年齢：97歳 要介護度：要介護2
 認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅱb
 障害高齢者の日常生活の自立度：A2
 生活歴：PTAや地域の活動を80歳までおこなっており、近所に買い物へ行くと必ず誰かしら知り合いに会っていた。

- ① モンテッソーリケアの手法を取り入れたアセスメントを行い、本人の既存能力(読字力の調査)・A様の趣味嗜好などを深く知る。
- ② PAL活動レベルを使用したA様への関わり方をより詳細に分析する。
- ③ A様の『他者との交流を楽しむ』に注目し、今回はおやつ給仕係をお願いする。その際、混乱が少なくなるようメニュー表の開発や職員の関わり方(声掛けなど)の統一化を目指す。
- ④ 職員に向けてBPSD+Q評価を使用し、取り組み前後の数値化を図る。(令和5年7月～11月末)

(活動の成果と評価)

最初は失敗するのを怖がり、前向きな参加では無かったが毎日の習慣化とし、メニュー表などをA様が分かりやすく、使いやすいものとして試行錯誤に重ね、手順を繰り返すことで本人の『出来る』という実感に繋げていくことができた。

また認知症カフェにも出向き、ウェイトレスとしての役割を提供した際、地域の人たちと積極的に交流することができ、その日1日はA様にとって認知症の周辺症状が緩和されやすい結果があった。

(例：歩行器の使用忘れがない/混乱が少ない等)

そして、取り組み前にあった排泄の失敗が減り、気分の落ち込みも少なくなりBPSD評価の数値も大幅に減少した。何よりも、A様自身が失敗を恐れずに物事に対して積極的に取り組む姿勢の変化が職員誰もが目に見えて分かる形となった。

(今後の課題・考察・まとめ)

『認知症だから出来ない』というマイナスなイメージを多く持たれやすい現状だが、その人らしくいるために介護職員として、その人に合った認知症ケアの手法を用いて自立支援に繋げていく必要がある。

そのためには、対象となる方の生活歴や趣味嗜好などを深く知り、何に興味を持っているのかを普段の関わりの中で見つける事が重要であり、暮らしの中に楽しさ・やりがいなどを自己選択できる環境整備が求められている。

このことから、介護職員のチームとしての取り組みが求められ、目標に向けて認知症ケアの普及啓発を事業所内でさらに展開していき、より良いチームアプローチへ繋げていきたいと考える。

(参考・文献など)

認知症の行動・心理症状質問票 (BPSD+Q/BPSD25Q)
 PAL活動レベル (著: Pool, Jackie 訳: 小川真寛)
 モンテッソーリケア (一般社団法人日本モンテッソーリケア協会/一般社団法人AMI友の会NIPPON)

日頃の所作は私の気持ち

◆キーワード

- 1 BPSD への関わり
- 2 自己決定支援
- 3 日常生活の回復

～言葉にしなくても～

奈良県奈良市

いりょうほうじん あすかかい ぐるーぷほーむあんじゅろみつがらすのさと
医療法人 あすか会 グループホームアンジェロ三碓の里

なかたに まり

発表者：介護職員 仲谷 真理

認知症対応型共同生活介護

奈良県奈良市学園大和町にて平成25年5月に開設。令和6年5月で11周年を迎える。地域密着型サービスとして高齢者が住み慣れた地域で生活できるように地域に根差した支援を実施している。

(はじめに)

パーキンソン病で覚醒が悪い時間が長くなり、水分摂取に関する取り組みを実施。また日頃の様子から見えてきた課題に対する新たなアプローチを踏まえ、その方の目線でき関わっていった結果、介護で大切な事を再確認することができた事例をここに報告する。

対象者：K.T様 88歳 要介護3 女性

現病歴：パーキンソン病

令和3年5月に右大腿部頸部骨折され、病院に入院となる。退院後、令和3年介護老人保健施設アンジェロに入所され、退所後、グループホームアンジェロ三碓の里に入所となる。

パーキンソン病の症状により、覚醒の悪い時があり水分の摂取量が少なくなっていた。

(取り組んだ課題)

1. 水分は自ら摂取されるものの、日中覚醒されている時間が少ない

- ・傾眠されている時間が多い
- ・服薬やお食事の摂取に支障が出ている。

2. 水分摂取に対する意欲の向上

- ・お茶を好まれない
- ・介助にて水分摂取を促しても拒まれる。
- ・口中に溜められたままで飲み込みされず吐き出される。

(倫理的配慮)

今回の発表に当たり、ご利用者ご家族に承諾を得て個人情報については配慮を行っている。

(具体的な課題への取り組み)

1. 服薬時間の見直し。

T様の覚醒している時間が短いこともあり、これまで服用されていたマドパー配合錠の服用時間を変更できないのか？主治医に相談して、服薬後3時間後に再度服用可能であることを確認した。これまでは朝食後服用し、その後13時と16時に服用していたが、今までの時間では傾眠されることが多く、服用するにも時間を要していた。その為、朝に時間を早めて服用し、服用時間より3時間空けてから一日計

3回服用していただく事にした。

2. 水分の提供方法の変更。

施設で提供するお茶とは別にジュースを家族様に持って来て頂いていたが、食事量の低下により、1日1本の栄養補助食品エンシュアに変更している。ジュースよりもエンシュアを好まれるご様子であった為これを継続し、午前と午後の2回に分けて提供することとした。その際、冷たいものを好まれることから、冷蔵庫で冷やしておく事とした。毎日違う味をご用意させて頂く事で、T様が飽きられない工夫をしている。また、お食事の際にスプーンを上手に使ってみそ汁やお茶を飲まれていたことから、水分提供時にもティースプーンを添えて提供する事とした。

(活動の成果と評価)

日中に傾眠されることが少なくなり、日によっては全く傾眠されない事もあった。それにより、自身でコップを持ち飲水される機会が増え、結果として水分摂取量が増加している。また、お食事中に傾眠されることもなくなり、食事量が増え、覚醒時間が長くなった事で、次の服薬もスムーズに行えるようになった。水分提供時ティースプーンをお渡しすることで、ご自分でコップから掬って水分を摂取されていることがよく見られるようになった。他にお茶、コーヒー、紅茶と定期的に提供し自身で選ばれる事で選択肢が増えた。

(考察・まとめ)

服薬時間変更と水分の提供方法に着目して見えてきた事としてT様は自身の気持ちを大事にされる方だという事だった。その気持ちを尊重したうえで、水分摂取を強要するのではなく、自身のペースで飲もうと思える状況を作り出す事が、今回の結果に繋がった。T様の所作に注目したことにより、T様の思いを汲み取ることが出来つつある。今後も利用者様の気持ちを尊重し、自ら行動を起こして頂くよう働きかけをしていきたい。

通いの場と活動を通して元気な生活

◆キーワード

- 1 通いの場
- 2 活動と元気
- 3 地域との交流

楽しみながら認知症予防と元気な生活

千葉県・東金市

グループホーム ゆりの木苑

えんどう けいいち

発表者：遠藤 慶一

共同研究者：グループホーム職員一同

社会福祉法人ゆりの木会 グループホームゆりの木
平成13年4月開設 2ユニット 定員18名
他に認知症対応型デイサービス、特別養護老人ホーム
などの複数施設を併設

【理念】夢と感動そして安心と楽しさ
～誰もが尊厳を持って住み慣れた地域でその人らしい生
活をおくる事ができるように支援いたします～

(取り組んだ課題・はじめに)

令和5年4月から、楽しみながら認知症予防と機能維持の目的で同じグループの病院にあるデイケア（ステップゆうゆう）に通うこととなる。それまでは、コロナ感染の影響で外出や他者との交流もずいぶん減ってしまった中、新たな活動の場交流の場としてデイケア通所をはじめた。合わせてグループホームでの関わりを通して利用者の変化について報告。

(倫理的配慮)

今回の発表の趣旨をご本人、ご家族に説明させて頂き、資料などの掲載の承諾を得た。また、個人が特定されないように配慮する。

(具体的な取り組み)

- ・フロアーの利用者全員（18名）、1ユニット9名の利用者が日を分けて車で5分ほどの場所にあるデイケアに通い認知症予防プログラム（体操、運動、レクリエーション、ゲーム、回想法、創作活動、行事）を実施。
- 時間は9時30分から15時30分。送迎やプログラムに職員も1名同行。
- ・通所に合わせて利用者の外出支援。
整容、自分で身だしなみ、身支度を整え、お出かけ前の衣類の選択などを実施。
- ・グループホームでもデイケアがお休みの日はステップゆうゆうで行っている体操や回想法などのプログラムを取り入れる。グループホームにある中庭で日光浴や体操などの実施で活動的に過ごしてもらう。

(活動の成果と評価)

- ・1年間通所を継続し生活の中の日課となりメリハリが出た。デイの職員や通っている地域の方との交流もでき、楽しみながら通っている。
- デイの日は夜間の安眠につながったり、機能の維持向上にもつながっている。
- ・職員もデイケアに同行する事でデイケアで行っている体操やレクや行事の時に回想法を取り入れたたり

日頃の関わりにも意識的に認知症予防プログラムを取り入れている。

- ・入居者の変化 92歳男性のケース 通所前は口数が少なく1人で静かに過ごすことも多かったが、デイケアに通い始めてからは家族の事や好きな将棋の事など色々な事を話すようになり、職員の手伝いも積極的に行うようになった。

- 83歳女性のケース デイから帰ってくると今日の出来事を職員に楽しく話す。お出かけの後は心地よい疲れ、ご飯も美味しくいただいている。ご家族面会時はデイケアが話題に。「車で皆で楽しい所へ行くんだよ」と楽しそうに話す。

それ以外の方たちも、出かける準備、衣類や身だしなみ等に気をつける様に、出かけることをとても楽しみにしている。

- ・1年間、通いの場で楽しく活動的に過ごしたことにより、また、グループホームでの日光浴や体操などの取り組みにより、元気で健康的な生活につながっている。

令和5年度と令和4年度を比較すると利用者の入院数、入院日数が減った。基礎疾患の悪化による入院以外に入院がほとんどなかった。

令和5年度は骨折による入院がなかった。転倒しても骨折に至らなかった。

- ・長谷川式の点数が利用者によってはあがった。認知症予防、見当識の改善 朝の決まった時間に出掛ける事、着替え、整容をし出かける準備をする事、普段とは違う予定がある事で日にち、曜日、時間をより意識できまた、デイで実施しているプログラムの回想法で昔の事など楽しく思い出しながら話すことで脳の活性化につながっている。

(今後の課題・考察・まとめ)

通いの場がある事で日課になり、楽しみながら機能維持や向上につながった。人と会える、地域に出る喜び、交流の場や楽しみがある喜びの実現にもつながった。今後も通いの場やグループホームでも普段から楽しく活動的に過ごしながら日々、元気に生活していける様に支援していく。

新規利用者の早期の安心・定着を実現する

◆キーワード

- 1 変わるの私たち
- 2 優先順位
- 3 自己肯定感

好転スパイラルを生み出す

山口県・下関市

しょうびかい その
社会福祉法人松美会 アイユウの苑グループホームえとう ふみひこ
発表者：管理者 江藤 文彦

共同研究者：大野直樹・西山祐恵

アイユウの苑グループホームでは、職員の平均勤続日数が3,692日(R6.6.30時点)と同じ職員で長い月日と一緒に研鑽してきたという事実と、毎日の入浴の実施をはじめとする、全職員でひたむきに積み重ねてきたサービス提供とそのことによる信頼が最大の強み。かつ近隣の事業所にはない「くもん学習療法」や「葉酸摂取の推進」などといった取り組みを実践し、現在に至る。

地域の自治会にも所属し、職員が自治会の副会長を務めた時期もあり、自治会との相互に助け合う関係性も構築できている。

松美会は、日本で初めて「社会福祉法人」「特別養護老人ホーム」「在宅介護サービスの複合供給体」として、1999年10月1日にISO 9001の認証取得、2022年2月7日にはISO 45001の認証取得。

2005(平成17)年7月にアイユウの苑グループホーム開設。

スーパーに隣接し、近隣には郵便局やコンビニエンスストアがある。またホームの前は小学校の通学路となっているなど、普通の街中にあるグループホーム。

認知症であっても普通の生活を送っていただく環境が整っている。

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホーム入居の際に利用者の家族が最も心配することの一つとして、利用者本人が住処が変わって戸惑わないだろうか、新しい住居・人間関係に馴染むことができるだろうかということが挙げられる。

また利用者当人も新しい環境に戸惑い、入居後しばらくは落ち着かないということはしばしば見られ、さらにその落ち着かない言動が他の利用者の不安定に繋がり、職員がその対応にも苦慮するということが多くのグループホームの介護現場で見られることではないだろうか。

この問題の解決・解消に2015年1月より当苑で実践し、その結果ほぼ100%の利用者が短時間で当苑の生活に馴染み、不安定な状態を大幅に緩和できた取り組みを報告する。

(具体的な取り組み)

新規に入居となった利用者には、優先順位を最優先とし、全職員で集中的に“本気で”かかわりを持つようにした。具体的には、活躍できる場面を創り出し、その場面でタイムリーに行き届くものやその過程を承認することを、全職員で“本気で”実施した。

例えば洗濯物をたたむことにおいては、前日の衣類をたたんでしまった後でも、別にたたむ衣類やタオルなどを用意し、当人に協力していただくことによってたたむ場面を増やし、たたみ方やスピード、丁寧さ、協力してくださろうとした気持ちへの感謝などを、“当人に伝わるように”、シャワーのようにたくさん伝えることを集中・継続して実施した。

(活動の成果と評価)

ほとんどの新規利用者が1,2日で落ち着いて生活を送られるようになり、早い方では入居当日に表情が緩み、生活を送ることができた。時間を要した方でも、3日もすればほぼ落ち着いた生活に移行できた。

その結果、従来から利用していただけている他の利用者にも、早い段階で従来通りに近い介護計画に則った生活(本人の嗜好や能力に応じた生活)を送っていただくことができた。

1例においては、当苑利用前には他のグループホームに入居されたが入居後の本人の興奮が激しく、そのグループホームを退居して自宅に戻っていたケースがあり、その方も当苑入居後には、3日後には落ち着かれて生活を送られるようになった。

新規利用者が落ち着かれることによって他の利用者への支援が行ないやすい状況となり、職員の過剰なストレスを防止でき、また自分たちのアクションにより新規利用者が落ち着かれていく状況は自信にもつながり、次の入居の受け入れの際にも精神的なゆとりにもつながっている。

また利用者の家族も最大の心配事が短期間に解消・軽減されることから、職員の頑張りの評価に繋がり、好転スパイラルを描けている。

(今後の課題・考察・まとめ)

当苑は長い平均勤続日数を誇るが、定年や結婚・出産などやむを得ない退職はあり、今後もそれらは控えている。新たに迎えた職員に当苑の方針を共有し、さらに共に研鑽を重ねる必要がある。

認知症予防に着目した歩行練習について

◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 フレイル予防
- 3 歩行練習

おあしす ひらの

大阪府・平野区

グループホームオアシス平野

かいごしょく うら かずき

発表者：介護職・浦 一希

運営主体：社会福祉法人 大和福寿会
 施設名称：グループホームオアシス平野
 提供サービス：認知症対応型共同生活介護

所在地：大阪市平野区背戸口3丁目7-18
 開設：平成 29年 5月1日
 定員：18名 (9名×2ユニット)

(はじめに)

新型コロナウイルス感染症問題が2020年に起こり、世界規模の非常事態となる中、「コロナフレイル」と呼ばれるウイルスへの感染による健康被害だけでなく、高齢者への自粛生活長期化による顕著な生活不活発を基盤とするフレイル化およびフレイル状態の悪化、いわゆる健康二次被害が起こった。当事業所においても、外出や運動、地域交流の機会の減少により、利用者様の認知機能や身体機能の低下が危ぶまれることとなった。本研究はこうしたコロナ禍での活動自粛が続く中、ただただ日々の運動を行うだけでなく、職員と入居者様が一緒に楽しく正しい歩行訓練に取り組むことで、認知症やフレイルの進行を遅らせること、失われた活気を取り戻すことはできないか、と考え行った取り組みについて報告する。

(倫理的配慮)

対象者のご家族様に本取り組み内容と発表について説明し、発表や写真掲載の承諾をいただく。

(取り組み内容)

- 1) 歩行姿勢の矯正と歩行練習
- 2) 定期的な長谷川式簡易知能評価スケール(以下、HDS-R)と生活機能評価の実施、健康状態の把握とフィードバック

(対象者)

A様 81歳女性 要介護1 HDS-R:17点 フレイル
 B様 91歳女性 要介護3 HDS-R:15点 フレイル
 (具体的な取り組み)

1) ①週に2~3回、正しい姿勢で歩行練習を行い、撮影した歩行練習の動画を対象者自身と職員と一緒に見ながらどこが悪いかを考える。

②取り組み開始から3か月目までを初期、4か月目~6か月目までを中期、7か月目~9か月目までを後期とし、段階的に歩行訓練の強度を上げるため、初期では軽度の歩行訓練として2000歩を目標に20分程度ゆっくりと歩く。中期では2700歩を目標に25分程度歩く。後期では階段の昇降や中強度の歩行訓練として3500歩を目標に25分程度の歩行を行う。

2) ①取り組み開始初日と3か月目、6か月目、9か月目にHDS-Rと生活機能評価および体重・握力・歩行

速度・2週間以内の倦怠感の有無・定期的な運動の有無の評価・測定を実施する。

②職員同士が連携し、運動を無理強ひせず、前向きに取り組んでいただけるよう精神面のサポートを行った。

(取り組みの成果)

A様は取り組み開始時点ではHDS-R:17点であったが、6か月目・9か月目での実施結果は20点へと向上した。生活機能評価においては、取り組み開始6か月目頃より運動に関する項目や鬱に関する項目において改善が見られた。

B様は取り組み開始時点ではHDS-R:15点であったが、6か月目・9か月目での実施結果は18点へと向上した。生活機能評価においては、取り組み開始9か月目には運動に関する項目や鬱に関する項目において改善が見られた。

また、両者ともに本取り組みによって体重の減少、握力の増加、歩行速度の上昇、倦怠感の解消が見られた。

(考察)

歩行姿勢の矯正や歩行練習を継続して行い定期的にフィードバックをすることで、フレイルの予防・改善だけでなく、歩くことが習慣となり、倦怠感の軽減による充実感や意欲の向上・認知機能の改善に繋がったと思われる。

(まとめ)

コロナ禍において外出が制限される中、施設内での限られたスペースでの取り組みであったが、運動機能だけでなく認知機能や生活への意欲においても改善傾向が見られた。

今後も入居者様それぞれに合わせた強度での取り組みを行い、認知症ケアやフレイルの予防・改善を行っていく。

(参考・文献など)

- ・公益財団法人日本理学療法士協会『理学療法ハンドブック シリーズ8 認知症』
- ・飯島勝矢『5. フレイル健診 COVID-19 流行の影響と対策:「コロナフレイル」への警鐘』日本老年医学会雑誌 58巻2号(2021.4)

モンテッソーリケアを取り入れた介護の実践

◆キーワード

- 1 自分で出来る
- 2 環境を整える
- 3 状態に合ったもの

～持病の進行があっても、いつまでも自分の力で生活したい～

ほしのいえちゅうおう

岡山県・岡山市

グループホーム 星の家中央

発表者：エリアMG イイダ ヒロユキ
飯田 宏之

共同研究者：グループホーム スタッフ一同

概要

認知症対応型共同生活介護

2005年 グループホーム星の家中央 開設
2ユニット 18名定員

子どもの自発性を育む環境を大切にするモンテッソーリ教育のメソッドを取り入れた『モンテッソーリケア』を実践し、認知機能の維持改善を目指しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

実践報告させて頂く A 様は 84 歳の女性で、10 年前にパーキンソン病を発症。現在、パーキンソン病認知症を主疾患として要介護 3 の認定を受けている。家族への被害妄想やせん妄(幻視)が顕著となり精神科へ入院し、退院後はサービス付き高齢者向け住宅へ入居。その後、第 3 腰椎圧迫骨折による再入院を経て、グループホームへ入居となる。

インテーク時の本人聞き取りでは、退院後は身の回りのことは自分でしたい、との意向があった。パーキンソン病等の持病を抱える方に対し、本人の自己肯定感を育むケア方針の実践について、ポイントを報告する。

(倫理的配慮)

研究発表にあたり、本人、家族に事例発表・写真の記載についての承諾を得た。

(具体的な取り組み)

入居当初は、「家族へ電話してほしい」「お金や株のことが心配」など、精神的に落ち着かないことが多かった。また、ご飯にゴミが入っている、居室に蛇が出る、男性入居者を夫と思い込み強い口調で叱責するなど、トラブルになる事もあった。

職員が作業をしていると「私がやろうか」「自分の洗濯物は自分で洗いたい」などの言動があり、「自分でやりたい」という意欲が伺えた。パーキンソン病により、振戦、筋固縮などの進行が見られたが、本人の力で実行可能となるよう対応を見直していった。

① ゆっくりと関わる

生活に対する意向やこれまでの生活歴、家族との関係、地域との関わり、仕事や趣味などをしっかりと把握したうえで、日々変化する気持ちを汲み取り、介護者のペースではなく、本人のペースでゆっくりと時間をかけ対応することを心掛けた。

② 表示を設置する

見当識障害や記憶障害の支援として、【場所】【時間】【物】【活動】【手順】など視覚からの情報が確認できる環境を整え、主体的な活動を支援した。

③ 自発性の尊重

本人の意向に合わせて環境を整えることで、可能な限り自分で出来るように支援する。

本人から聞き取った複数の意向の中から、「洗濯物や掃除を自分でしたい」「コーヒーをみんなに振舞いたい」という二点に取り組んだ。まずは洗濯機の場所、操作順がわかるように表示を設置し、乾いた洗濯物をご自分のタイミングでたたむことが出来るように、表示を設置したカゴに入れた。次に手に取りやすい場所に掃除道具を置き、表示を設置した。設置後は、自分のタイミングで掃除道具を取りに行き、掃除して下さっている。本人から「モップが重たくて出来ないわ」との発言から、軽いほうきとちりとりに変更したところ、「これなら使えるわ」と気に入った様子で掃除を継続された。

長年、喫茶店を運営されていた A 様。「自分が淹れたコーヒーをみんなに振舞いたい」との意向については、ドリンクコーナーにドリッパーセットを分かりやすく並べてみると、現役の頃のようにコーヒーを振舞って下さった。

(活動の成果と評価)

A 様の場合、パーキンソン病により身体機能が少しずつ低下する中でも、ご本人の「まだ自分でやりたい」、「人の役に立ちたい」という思いが強くあった。グループホームに入居して約 1 年が経過するが、持病の進行が見られ、以前使用していたものが使えなくなり、歩行状態も悪化している。しかしその中でも、自己決定や自己肯定感を意識して支援することで、「お寿司を食べに行きたい」、「コーヒーを振舞いたい」などの声が変わらず聞かれており、前向きで意欲的な生活が継続出来ているのではないかと考える。

(今後の課題・考察・まとめ)

持病や認知症の進行などにより、ADL や認知機能の低下が見られても、その時々状態に合った環境を整えることを支援者が意識し工夫することが重要であり、今後も自尊心を損なうことなく、楽しみを持った生活を継続できるように支援していきたい。

グループホームだからできるゆったりとしたケアを目指して

◆キーワード

- 1 笑顔
- 2 馴染みの関係
- 3 寄り添うケア

～先生が居って良かったわ～

島根県・安来市

しやかいりょうほうじん しょうりんかい

社会医療法人 昌林会 認知症高齢者グループホーム きららの家

おおしま さとこ

発表者：介護福祉士 大島 智子

共同研究者：車 奈緒美

認知症対応型共同生活介護

1ユニット（9名定員） 平成12年4月開設

ゆったりとした家庭的な雰囲気の中で寄り添うケアを行っています。同法人の病院が隣接している為、医療連携が図られており、安全で安心して自信を持って生活ができるように支援しています。

(はじめに)

私は以前、特別養護老人ホームに勤務していて業務優先のケアに疑問を感じていた。今回、グループホームに配属となり、利用者とゆったりした関わりを持つ中で「その人を知りたい」「深く関わりたい」という思いを持つようになった。

そんな中、A氏の担当となる。A氏はホールでうつむき加減に過ごされ、笑顔も少なく他利用者への過干渉が見られ、周囲から孤立されている事が気になった。A氏が心地よい生活が出来るよう、担当としてまず自分自身が馴染みの関係作りをし、全スタッフでケアの共有を行う事によりA氏の良い変化に繋がったので報告する。

(倫理的配慮)

事例発表にあたり、対象者、ご家族に目的、個人情報配慮等の説明を行い、承諾を得た。

(具体的な取り組み)

対象者：A氏 94歳 女性 要介護3

アルツハイマー型認知症

①スタッフから助言をもらい、情報収集を行う

暮らしのシートを活用したり、昔の様子をご家族から聞いたりし生活史を把握した。前担当者からは達筆なので食事のメニュー書きや筋力低下予防の為、廊下を7往復する事を日課にしている。また、歌が好きで、保育士をしていたので子どもの話をすると笑顔が出る。また、日々の生活の中で過干渉があり、イライラ感もあるという情報を得た。

②実践(馴染みの関係作り)

その情報を基にまず自分が側にいてコミュニケーションをとり、顔馴染みになるようにした。

A氏が廊下をつまらなさそうに歩かれ、途中で止めようとする事が多かったので、一緒に歩く事を実践した。保育士の時の話をすると嬉しそうに子どもたちの話をしたり、好きな歌を口ずさんだり楽しそうに歩く姿が徐々に見られるようになる。側にいる事で安心出来たのか笑顔が出るようになったが、「早く食べなさい」といった過干渉は続いていた。

③自分自身の関わりをスタッフに報告し、カンファレンスで意見を聞く

A氏は元保育士で先頭に立って皆を自分のペースで引っ張ろうとされる為、過干渉が出るのではないかと。その為、「あの人は偉ぶっている」と周りの利用者に敬遠され孤立が深まるのではないかとという意見が出た。また、A氏は「泊まってもいい?」「お金がないけど大丈夫?」等、同じことを繰り返しスタッフに尋ねる様子が見られることから常に不安感があり聞かれる度に「泊まっていますよ」「大丈夫ですよ」と安心出来る声かけを行ってはどうか。担当スタッフだけではなく、自分たちもA氏の笑顔が見たい。A氏と良い関係を築きたいという意見もあった。

④統一したケアを実施する

A氏と他利用者との会話の橋渡しをしたり、A氏に寄り添う時間を出来るだけ多く作るよう試みた。その際、記録用紙を活用し、関わったスタッフが気付いた事、感じた事、新たに分かった事等を簡潔に記入してもらった。

(活動の成果と評価)

全スタッフでケアの共有を行い、馴染みの関係が出来た事で一緒に歩く時はA氏から手を繋いでこられる姿が見られるようになった。ホールでうつむいて過ごされる事が減り、他利用者やスタッフに自分から話をされたりし、笑顔が増えた。廊下を歩き終わった後には「お疲れ様でした。大変でしたね」と労いの言葉をかけると「先生が居ってくれたけん良かったわ。ありがとう」という返事が返ってくるようになった。

(今後の課題・考察・まとめ)

スタッフが寄り添い、側で話を聴く事がA氏の安心感に繋がり笑顔が増えた要因であると考え。信頼関係を築き、全スタッフで情報を共有し統一したケアを行う事でA氏の心地よい生活に繋げる事が出来た。

今回の結果から利用者ゆったり関わる事がグループホームだからこそできる関わりであり、その人を知り、その人の内面の思いを汲み取る事が大切である事を再認識出来た。

今後も利用者一人ひとりに合わせたケアを模索しながら、全利用者に対しても実践していきたい。